

アメリカ人幼児の第2言語としての日本語習得に関する 学際的・事例的研究 (I)

田 中 幸 子 ・ 宮 川 充 司*

An American Infant Acquiring Japanese as a Second Language:
A Multidisciplinary Case Study (I)

Sachiko TANAKA and Juji MIYAKAWA

Abstract: This article reports the linguistic and social accommodation of a three-year-old American child, whose mother tongue is American English, in a Japanese kindergarten. The data come from the weekly observation and video-tapes of the child's behaviors and utterances in relation to her teacher and classmates. Though this is a preliminary report of the first three months of our on-going research which officially began in April, 1995, we saw how she grew socially, psychologically and linguistically in her new environment during this period. We noted the process was especially facilitated through a medium of another English-Japanese bilingual child whom she had known well before she entered the kindergarten. We noted the growing amount of her knowledge and use of Japanese by watching her interactions with teachers and other children in performing various activities at kindergarten.

日本の国際化社会の進展に伴い、日本に居住する外国人家族が増加してきた。こうした社会的な動静を背景に、日本の通常の保育園・幼稚園・学校に通園・通学する外国人の子どもたちは、次第に珍しい存在ではなくなってきている。こうした子どもたちの中には母語と日本語を同程度に獲得しているバイリガ的な子どもたち、母語より日本語が優勢な言語となっている子どもたち、あるいは日本語が実質的な母語となっている子どもたちといった多様な言語習得形態の子どもたちがいる。

中学生・高校生といった、母語が確定した年齢で初来日した外国人の子どもたちの中には、日本語の習得で困難を示す子どもたちは見られるが、乳幼児期あるいは小学校低学年くらいまでの低年齢で来日した子どもたちでは、日常生活レベルでの日本語の獲得は比較的スムーズであると考えられる。

こうした低年齢の外国人の子どもたちの異文化適応と日本語の獲得過程について、言語学・心理学といった関連分野での科学的な研究も試みられてきている。例えば、第2筆者

*The authors express their sincere gratefulness to Heidi and James Gordon, Ms. Hiromi Furuya, and to Rev. Hans Magnusson for making this research possible.

らによる心理学サイドからの研究がある。宮川ら(宮川, 1989; 宮川・浅井, 1988, 1989)は、日本の幼稚園に受け入れたアメリカ人幼児兄弟の事例について、入園から1年半にわたる継続的な行動観察を実施し、外国人幼児の特異な異文化適応過程について分析をした。宮川ら(宮川・中西, 1994, 1995; 中西・宮川, 1994)は、日本の保育園に受け入れた日系ブラジル人幼児事例について、ビデオ・カメラを用いた継続的・組織的なデータ集収・分析により、異文化適応初期の個人差のパターンを明らかにした。同様な方法により宮川(1996)は、日本の保育園に受け入れられ、急速な異文化適応と日本語獲得を示した中国人幼児の事例を分析し、急速に異文化適応と第2言語獲得を進めていった幼児特有の事例を報告している。

ただし、こうした多様な現象を取り扱う分野について、単一科学からのアプローチはそれなりの限界があり、その弱点を補うために関連科学間の連携による学際的なアプローチによる多面的な分析がそれなりに有効性を発揮できるものと考えられる(マーハ・湯浅, 1991)。

そこで、外国人幼児が、第2言語としての日本語をどのように獲得していくかを明らかにしていくため、言語学・心理学からの学際的な研究プロジェクトを実施した。その学際的なアプローチにより、アメリカ人幼児の1事例について、幼稚園入園直前、幼稚園の保育場面で約1年間の継続的・組織的な行動観察を実施した。本論文では、その最初の3か月間に第2言語としての日本語の獲得過程について、日本の幼稚園での適応過程とのかかわりから、行動観察データを中心に詳細な分析をしようとするものである。

方 法

研究対象児

本研究が主対象とした幼児、マーリー(仮名)は、日本生まれで、アメリカ合衆国国籍の女児である。継続的な行動観察を開始した1995年4月10日時点では、年齢満3歳0か月の第1子で、下に生後8か月の妹がいた。父親・母親ともアメリカ合衆国国籍で、家庭の言語環境はアメリカ英語。父親は、日本の大学で英語の教鞭をとっている。母親も、大学で英語の非常勤講師として働いており、筆者たちと面識があったため、対象児の幼稚園入園直前に研究対象児としての同意を得た。また、マーリーが入園予定の幼稚園にも、研究プロジェクトを開始する前に、事前交渉をし、研究協力への同意を得ておいた。

研究主対象児の通園する幼稚園の沿革

本研究の中核的なデータとなる対象児の行動観察を実施する場所は、対象児が通園する、愛知県日進市にあるプロテスタント系の3年保育の私立幼稚園。園児数は、対象児が入園した当初園児数3～5歳児クラス合計153人(1995年5月1日付資料による)。5歳児クラス合計50名、4歳児クラス合計63名、3歳児クラス合計40名で、各年齢とも2クラス編成となっている。この幼稚園では、数年前から外国人幼児や帰国子女、(国際結婚によって形成された)国際家族の子どもを受け入れた体験をもっていた。

研究の主対象児マーリーが通園する3歳児クラス、もも組(仮称)には、合計23名(男児10名、女児13名)の園児が在園。その中には、マーリー以外にもスイン(仮名; 以下子

どもの名前はすべて仮名とする) という外国籍女児 (韓国国籍) が同時に入園。また、同じも組には、国際家族の子どもである、セバスチャンとショウヘイ (いずれも男児) が同時に入園。この2人の国際家族の男児は、マリーが1歳の頃から参加していたプレイメイト (名古屋市内のマンションの集会所を借りて、外国人や国際家族の子どもたちを対象に、定期的で開催している共同保育) にも、一緒に参加していた。

その他、5歳児クラスには2名の外国人女児 (オリアナ：カナダ；キャロライン：アメリカ合衆国)、4歳児クラスには、1名の外国人女児 (キャティー：アメリカ合衆国) と2名の国際家族の女児 (メイとモエ) が在園していた。

データ収集の方法

データの収集方法は、自然的観察法の手法による対象児の定期的な行動観察を、もっとも基本的な方法としたが、その他両親やクラス担任等から対象児に関して報告される情報は、フィールド・ノートのメモとして残し、後に行動分析の参考情報として活用した。

主対象児に対する定期的な行動観察は、入園式 (1995年4月7日(金)) から登園2日目にあたる1995年4月10日(月)から開始して、約1年間、原則として毎週月曜日9時50分頃～11時30分頃までの午前中の保育の時間帯で行った。ただし、対象児の欠席や幼稚園の行事等の関係で、観察ができなかったこともあった。本論文で取り扱うデータは、その最初の約3か月間1995年4月10日(月)～7月3日(月)までの合計11回分の記録である。なお、第1回目の観察に先立ち、入園式の直前 (4月5日(水)) に上記のプレイメイトでの活動について予備的観察を行ったが、この日の観察では主対象児が一時帰国の後久々に参加したこともあって、プレイメイトでのプログラムにはなじまなかったため、分析対象からは外した。

観察の方法は、まず第2筆者 (心理学者) がポータブル・ビデオカメラ (Panasonic NV-X100：S-VHSC, 3CCD 固体撮像素子, 25倍デジタルズーム仕様) を用いて、主対象児の発話や行動を中心に、逐次的に収録していった。収録に際しては、主対象児の発話内容をできる限り詳細に分析できるよう、行動に直接的な影響を与えないよう注意をしながら、ビデオカメラを接近して収録した。これと同時に進行で、第1筆者 (言語学者) が、自由記述の観察記録として、主対象児の発話や行動およびその状況等に関して、フィールド・ノートに逐次的に記述していった。

その他、クラスメイト一人一人の顔写真や幼稚園やクラスに関する事項など、後で分析に必要と考えられる情報は、随時収集・保存をしていった。

結果の分析と考察

前述のようにして収集した観察データには、数種類の分析方法が考えられるが、本論文では、次のようなきわめて素朴な基礎的分析を試みることにした。まず、第1筆者が、原フィールド・ノートの記述を、第2筆者が収録したビデオを何回か反復再生しながら照合し、より正確性の高いフィールド・ノートの記述に修正していく。そのフィールド・ノートを基盤に、第2筆者が主対象児の行動的・言語的な変化を、分析・考察していくという、学際的アプローチならではの分析手続きを踏んでみた。

ビデオのこうした利用法は、瞬時的に生起する発話や社会的行動といった、即時的な

まの観察記録では記述の正確性に限界があり、欠落や誤記が混入しやすい事象の分析に関しては、きわめて有効な方法と考えられる。

事実、本研究の主対象児マーリーの英語および日本語の発話については、その場では細部を聞き取ることが困難なものも多数含まれていたが、ビデオ・データとの照合により、不明な部分も比較的正確に再現できたものが少なくない。また、ビデオ・データを、別にコンパクト・カメラで撮影したクラスメイトたち一人一人の顔写真と照合させると、仲間関係のダイナミックな展開を精密に分析する際に欠かせない、社会的なインターアクションの相手の特定にも、有用であった。

さて、こうした修正を加えて、記述の正確性を高めていったフィールド・ノートの概要を補足資料として示す。ただし、ここで公表する資料では、子どもの人名はすべて仮名に替え、原フィールド・ノートにあった実名のフルネーム等は意図的に別の仮名に置き換えることとした。その際、外国人幼児と国際家族の子どもは、カタカナで名前を表記した。それ以外の日本人幼児は、ひらがなの名前で表記した。また、研究のコンテキストから多少はずれる余分な記述は、紙面の制限もあるので、誤解を避けるために削除してある。それ以外は、フィールド・ノートに作為的な編集は、一切加えていない。

補足資料 田中のフィールド・ノートから

第1回観察 1995年4月10日(月) 9:50-11:00 入園式(4月7日)の後、登園2日目

9時20分 ベタニア幼稚園着。

子どもたちは運動場・部屋でそれぞれ遊ぶ。

母親の帰ったあと、ずーと泣いている男の子2人。

9時50分 バスが着く、マーリーは自家用車でバスに続いて到着。

母親について教室へ行き、セバスチャンに会い、外で走り回る。2階へ登ったり、廊下を走ったり。

上履きと替える。“That’s my shoe(s).”

10時10分 自分で履こうとする。“I can do it.”

猫を見る。“A cat is coming there!” “It’s coming.”

“Sebastian, come on!” “Come on, Shohei, come!”

部屋に入る。3歳児もも組園児数23名。

マーリーは一番前の右端にセバスチャン、その隣にかける。

泣いている男の子を見るため、先生が戸口へ行く。

マーリーが「せんせい、せんせい、せんせい。」と、3回呼びながら追っかける。一人で廊下を走り回る。

10時40分 オリアナ(6歳、女、白人)に廊下で会い、話をする。

オリアナ “How old are you?”

マーリー “Three.”

ふたりで何か話している。マーリーはさかんに首をたてに振って、応答する。

マーリー “Yes, yes.”

11時00分 ベタニア幼稚園を発つ。

第2回観察 1995年4月17日(月) 9:30-11:20 登園第2週目

9時30分 ベタニア幼稚園着。

子どもたちは運動場・部屋でそれぞれ遊ぶ。

先週と異なり、ずーと泣いていた子は適応し、何をすればよいか理解している。もも組の男の子が泣いて座っている。もう一人は、いすに座れず、立っている。

9時50分 バスが着く。マーリーは一番最後にバスから降りる。セバスチャンに迎えられ手を繋いで教室へ向かう。しかし、部屋へ入らずにカバンをかかえたままセバスチャンと廊下や二階へ上り走り回る。

10時05分 上履きに替え、カバンを先生に渡す。外に出て、盛んに園長先生と英語で話す。セバスチャンもそばにいる。

マーリーは、“Sebastian!”と呼んで、教室へ入る。

先生とシールを貼り、カバンをととのえる。先生がカバンをしまわせようとすると“**No!**”と言うが、先生が何かを言うと、頷いてカバンを渡す。

10時12分 椅子に座って、側に座った田中の肩を叩く。セバスチャンも。

10時16分 先生がおしっこについて、聞く。マーリーは分からないので、田中が英語で尋ねると、“**No**”と答える。“**Sebastian!**”と言う。

10時20分 後に座って泣いている男の子を、興味深く眺める。

あいさつの歌とお祈り。子どもたちは、一句ごとに先生の後について言う。

10時25分 歌と踊り。グー、チョキ、パー。日本語の問いに対して盛んに手をあげる。かっぱえびせん、ぐみのおやつ。ジュースを飲む。

マーリー、よくお話を聞いている。「**こんにちわ**」を言う、動作。

10時38分 帰りの時間。お祈りを先生の後について言う。

10時42分 セバスチャンが最初のバスで帰ってしまうと、マーリーは左手の親指を口にし、不安そう、寂しそうに、後ろを向いて座っている。

10時45分 立って戸を閉める。また座り、一人で座っている男の子のそばに行き、話しかけようとする。ひろしを押し、座る。人の椅子をしまい、自分は座る。靴をはこうとし、またひろしを押し。くつをはく。

10時52分 一人で廊下を走り回る。メイ(4歳児クラス、アメリカ人の母親とは英語で、日本人の父とは日本語で会話。)を見つけて“**I'm coming!**”メイの後について、庭を走り、すべり台、ジュングルジムへ行く。

11時05分 他の女の子とたいこ橋に登るが、ぶら下がれない。

11時08分 メイを見つけて、後について走る。他の子どもも加わり、三人で何かを話す。

11時11分 一人で教室の方へいく。黄色い手乗り文鳥(?)二羽、8人の女の子のそばで、一緒に鳥を見る。手を出そうとはしない。

第3回観察 1995年4月24日(月) 9:50-11:30 登園第3週目

9時45分 ベタニア幼稚園着。子どもたちは運動場・部屋でそれぞれ遊ぶ。少し数が少ない感じがした。送迎バスからマーリーが最後に降りてくる。ゆっくり、ゆっくり気が進まない様子で、マーリーは教室に向かう。セバスチャンが話しても、

- 元気がない。先生がマーリーの肩に手を置いて歩く。靴を替えたくない。子どものけんかをじっと見る。
- 9時55分 なかなか上履きに替えられない。はきたがらずに、腰を下ろす。
- 10時02分 廊下で腰をおろして遊ぶ。
- 10時12分 先生が上履きを履かせようとするが、ダメ。
- 10時15分 先生に抱かれて部屋にはいる。子どもたちは、男、女に分かれて線の上に座るが、マーリーは立ったまま。左手の親指をくわえて。
子どもたちは、歌、ジェスチャー。二階へ行く。
- 10時20分 マーリーは、一人残される。悲しそうにふくれている。戸口へ行き、外を見て、部屋にもどる。一人で線に沿って、歩き回る。
- 10時25分 先生に抱かれて、二階へ、全員の子どもたちと合同集会。マーリーは声を出して泣く。
- 10時28分 部屋を出て行こうとする。先生が連れて入っても、ダメ。田中のところに来る。
“Mommy, Mommy.” “I want to go down.”
- 10時35分 先生に抱かれて、少しずつ慣れる。先生の側に座り、指をしゃぶる。
子どもたちは、先生の話、歌、ジェスチャーなどに加わる。
- 10時25分 マーリーは先生のそばに座り、指をくわえる。
- 10時40分 もも組から教室へ戻る。マーリーは最初は先生に抱かれ、途中から手をつないで部屋に向かう。
- 10時46分 靴を替えて、外で遊ぶ。**セバスチャン**とブランコを見る。砂場で遊ぶ。**セバスチャン**と。
- 10時50分 マーリーは自分でスコップを探し、穴を掘ろうとする。今日はじめて笑顔。
セバスチャン “Can you dig this side?” マーリーはそれに応じて穴を掘る。
男の子のもつトロッコの中へ砂を入れる。
- 10時53分 上着を始めて脱ぎ、スコップで先生と2・3人の子どもたちと遊ぶ。先生が去っても、そのまま遊ぶ。
- 10時55分 ままごと。**4人**の仲間に入るが、まだ個々に遊ぶ。
皿の砂を**他の子ども**のトロッコに空ける。
- 11時05分 **メイ**が近づいてきて、一言ふた言交わす。**セバスチャン**が去る。田中に近づいて来る。不安そう。
- 11時08分 **セバスチャン**が鉄棒をする。マーリーそばで見ている。
- 11時12分 マーリー水たまりの周りに近づき、4・5人の輪にはいるが、手を泥水の中には入れようとしないで、見てるだけ。人指し指一本をそっと入れるが、すぐ止める。しばらく、シャベルで水をすくって水差しに入れて遊ぶ。**セバスチャン**と一緒に共同作業をする。
- 11時30分 ベタニア幼稚園を去る。マーリーの体調が数日良くない（母親の言）。

第4回観察 1995年5月1日(月) 9:50-11:30 登園第4週目

- 9時45分 ベタニア幼稚園着。雨が降り、子どもたちは部屋でそれぞれ遊ぶ。
- 9時50分 送迎バスからマーリーが最後に降りてくる。**セバスチャン**が「マーリーちゃん、

- マーリーちゃん」と呼んで迎える。マーリーは先生の背中を叩いて、傘を開いて欲しいような態度を示す。マーリーはセバスチャンを見て、笑みを浮かべ、部屋に向かう。傘箱に傘を入れる。
- 9時55分 自分で上着を脱いで、先生にカバンを渡す。新しいスカートを田中に見せる。先生が、靴を脱がせて上履きに替えようとするが、中へ入りたくない様子。先生に“**No!**”
- セバスチャンに近寄り、ニコニコ。セバスチャンとショウヘイと三人で、ブロックで廊下に腰をおろして遊ぶ。
- 10時00分 しきりに何かを話しているが、不明。
- “**This is (an) alligator.**”とショウヘイに教える。
- ブロックを手渡された「はい!」と言って受け取る。
- 10時08分 先生がブロックを片付けさせる。靴を脱いで、上履きに替えようとする。
- セバスチャンとショウヘイが口げんか、大声で、髪の毛を引っ張り始める。「なんだよ!」の連発。マーリー“**Stop it!**”セバスチャンの肩を掴んで何か言う。先生が「おかたづけ」というが、マーリーはなかなか部屋へ入らない。セバスチャンと手を繋いで部屋に入り、青い線の上に座る。まだ、女の子は赤線の上に座ることが分らない。
- 10時20分 部屋で、先生と朝の挨拶をし、マーリーはセバスチャンの後ろから肩に両手を置き皆と並んで二階へ向かう。
- 10時25分 ミーティング。マーリーはセバスチャンの隣に座る。皆と一緒に、ジェスチャーの真似をする。先生の話をよく聞くが、分かってはいない。時々、手を挙げて応える。全部ついていけない。
- 10時50分 部屋へ戻り、ブロックで遊ぶ。セバスチャン、ショウヘイ、マーリー。他の子どもたちは、12人で机の周りに腰掛け、粘土遊び。残り4人はそれぞれ、バラバラに、動き回ったり、本を見たり。
- 11時00分 セバスチャンとブロックのことで口げんか。
- マーリー“**Don't do that!**”マーリーとセバスチャン“**I'll do it!**”“**No!**”を2・3回繰り返す。マーリー少し気分を悪くする。思い返して、仲直りする。
- マーリー“**This, this is yours.**”
- セバスチャン“**This is mine.**”
- マーリー“**That's all I mean.**”床にブロックを並べる。セバスチャンは怪獣やロケットを立体的に作るが、マーリーは床の平面に色を集めて(黄色、赤)並べる。セバスチャンは青中心。
- 11時15分 マーリーは、上着、カバンを持って外へ、上履きを脱ぐ。田中がまだ帰る時間でないことを言うと、自分でまた上履きを履く。気分を直し、外を歩いて、別の部屋に入り、メイを探している様子(メイはこの日欠席)。
- 11時24分 マーリーは諦めてもも組みの部屋に戻り、“**Sebastian!**”と呼びながら、笑って、セバスチャンの後ろについて行く。
- 雨が降り、外で遊べない。

第5回観察 1995年5月8日(月) 9:50-11:30 登園第5週目

- 9時50分 バス幼稚園着。マーリー、バスから最後に降りる。先生に手をとられて部屋へ行くが、立ったまま。
- 10時00分 一人で立っている。セバスチャンが近づいてきて、何か話し、マーリー少し笑う。やっと腰を下ろして上履きに替え、部屋に入り皆の近くに。
- 10時05分 くつをはき、廊下を歩き、バスに行く。
- 10時15分 一人の男の子(まさひろ)が近づいて、マーリーと握手。
外で組ごとに並んで立つ。マーリー、となりの組のメイちゃんを見るが、相手にされない。セバスチャンを見て、左手で“Come, come”のしぐさ。
- 10時24分 お祈り。体操。マーリーはセバスチャンの肩をつかんで後に。しかし、女の子の列に戻る。音楽に併せて体操。3歳の子どもは、ほとんど立ったまま。年長児は体操。
- 10時40分 セバスチャンはマーリーの肩をつかんで歩く。大きな円になり、動き回る。
砂場に行く。マーリー滑り台で滑ってきて、先生とジャンケンポン。
- 11時00分 まさひろ、「三かいかったよ」マーリー「うん」とうなづく。(2回)
マーリー、ぶらんこ。ジャングルジム。マーリー、セバスチャン「せんせい！」
先生の笛を吹いて、飛び上がって喜ぶ。
セバスチャン「マーリー」。トロッコを引いて二人で走り回る。
- 11時10分 赤い家の中にセバスチャンと入る。砂を運んで、カップに入れて遊ぶ。
ゆりえと三人でままごとをする。なかなか話さない。
セバスチャン“Marli, this yours?”
マーリー「きて！なに！きて！」
セバスチャン, “Marli, give this to... This one here.”
- 11時15分 マーリー“OK”
セバスチャン“I want to put this one here.”
マーリー“OK”「きて。できた。いっぱいよ。」
ゆりえ「ほらみて」。初めてマーリーに話しかける。
マーリー「わうー」クシャミをする。「マミー、いないよ」
セバスチャン“Marli, you did green... みて, green.”
ゆりえ「だいじょうぶ？ホテル, ホテル」
セバスチャン“Let's do it... I'll go'n wash my hands.”
マーリー“OK”
今日、始めてセバスチャン以外の友達と親しくする。

第6回観察 1995年5月15日(月) 9:50-11:30 登園第6週目

- 9時50分 バス幼稚園着。マーリー、バスから最後に降りる。先生に手をとられて部屋へ行く。自分でくつを脱いでいる。
- 10時00分 先生「くつを靴箱に」マーリーそれに従う。
セバスチャンと会い、部屋でダンボールの家の中に入る。
先生、マーリーに上履きをわたすと、マーリー腰を下ろして履く。

- セバスチャンが箱の家に入り、よろこんで「イナイイナイバー」
- 10時05分 マーリー “Peep!” 窓からセバスチャンが顔を出す。
マーリー 「セバスチャン!」「せんせい!」と三回大声で呼ぶ。
「せんせい、みて。」マーリー、先生に「みて」と言っ、何かを渡す。
- 10時07分 箱の外へ出る。マーリーはセバスチャンの肩に手をおいて。
セバスチャン “Shall I go inside?”
マーリー “Yes”
- 10時12分 外へ出て、マーリーは先生に触れる。他の女の子の中へ入る。セバスチャンが喧嘩。セバスチャン、ショウヘイ、マーリーと三人で遊ぶ。ぐるぐる部屋を回る。マーリーは、粘土の入った箱をしまおうとする。重すぎる。
セバスチャン “I’ll do it. That’s too heavy.”
- 10時30分 マーリー、女の子と粘土板を片づける。そろえようとする。先生とふたりで。
マーリーはまだセバスチャンの後に座り、女の子の列に座らない。
「トン、トン、トン」と遊戯がうまくできる。
- 10時36分 隣の部屋(チューリップ)へ椅子を持っていく。マーリーはセバスチャンの隣に座る。立って、朝の歌。祈り。ハレルヤの賛美。感謝の歌。
座って「トントントントン、こぶじいさん」マーリーはだいたいできる。
- 10時50分 お話を聞く。席を立て、先生のそばに行き、笑う。
- 10時58分 立って、椅子へ戻る。お話おわり、祈り。
- 11時05分 「おはよう」の歌。「ハイ、ハイ、ハイ」早い動作がだいたいできる。
部屋に戻り、角にすわる。セバスチャン、ショウヘイ、マーリー三人一緒。
「いち、にい、……じゅう」何回も繰り返すので、マーリーもだいたい数えられるようだ。シールをかばんから出すように言われる。
マーリー 「せんせい!」大声で呼ぶ。
幼稚園の行事に慣れてきた様子。

第7回観察 1995年5月22日(月) 9:50-11:30 登園第7週目

- 9時50分 バス幼稚園到着。マーリーは、先生の降りるのを待って、先生の腕を掴んで部屋へ行く。
腰をおろして上履きをはこうとすると、まさひろとこうすけがじゃれているのを見て笑う。
- 10時00分 先生と一緒に部屋へ入り、片づけを手伝う。
- 10時10分 中廊下に張ってある写真を見て、バスで一緒の先生に何かを話す。マーリーは、まみちを押す。
- 10時12分 部屋へ戻る。セバスチャンの後に座る。
マーリー “I don’t have it” 頭の後を見せて何か話す。“You see the animal.”
りかこが何かを話すが無視される。セバスチャンと話す(一生懸命に)。
- 10時20分 「とんとんまえ」マーリー動作が上手になる。「せんせい、おはようございます」
また男の子の列に並ぶ。セバスチャンの後。
- 10時25分 2階へ。ショウヘイとセバスチャンのとなり。みつぎを座るよう引っ張る。

朝の歌。祈り。マーリー話をよく聞く。左の指をくわえる。教育実習生の紹介。マーリー「ふん、ふん」と首を縦に頷く。暗唱聖句「まことのイエス様」。手はおひざ。マーリー静かに座っている。

10時42分 部屋に帰る。セバスチャンと。「クルクルのパ」よくできる。ショウヘイが転ぶ。マーリー心配して先生のところに連れていく。先生「しょうへい、どうしたの。」マーリーは盛んに先生に何かをいう（英語・日本語?）。

マーリー “He slipped down.” セバスチャンに話し、二人で廊下を走る。

10時55分 うさぎのヘッドバンドを付けて、ショウヘイとセバスチャンと3人。

マーリー「ちょっとまって」ダンボール箱に入る。「ちょっとまって」ともう1度。

マーリー、ブロックを上げようとするがだれもいない。セバスチャンを見つけに行く。マーリー「ちょうだい」“Come!”

段々、幼稚園の様子が分かってきたようす。日本語が少しずつ出てくる。まだセバスチャンやショウヘイ以外の子どもと遊ばない。

第8回観察 1995年5月27日(月) 9:50-11:30 登園第8週目

9時50分 バス幼稚園着(外は雨上がり)。マーリー走って教室へ行く。セバスチャンとショウヘイを見て、うれしそう。

おもちゃで、3人で。マーリー “What can you do with it?”

セバスチャン「おはよう、マーリー」マーリーはニッと笑う。

マーリー “Come.”

セバスチャン “You can have this.”

マーリー「どうしたの。」「まーちゃん、つかってるの。」

セバスチャン “Can you share with that boy?”

まみちを押す。

マーリー「ちょっと、まって」「ちょっと、かして」

セバスチャン「だめ。これ。」

マーリー「なんでだめーすか。ちょっと、かして。えっ。」

10時00分 さくら組のかずま、むねひろが近寄って、おもちゃを囲む。

マーリー「ちょっとまって」外を走る。

まりこが「マーリー」と言って部屋から出てくる。

10時10分 マーリー、なかなか靴がかえられない。

おかたづけ。ロッカーの名前見て、マーリー “That’s Shohei.”

マーリー「これかして」こうすけを泣かす。田中にもぶつかってくる。

マーリー、ともたかの後に座る。ともみ、泣く。マーリーはセバスチャンと体をぶつけて、笑ってあそぶ。

10時20分 「トントンまーえ」2階へ。謎々、動物の鳴き声。

10時30分 静かに聞く。「バラバラ落ちる」「感謝」「おとうさんが駆けてきて…」

先生に抱かれているりかこに向かって、何か話す。「ハレルヤ」の歌。

10時45分 マーリー。話を聞きながら、指をくわえる。ミッキーとミニーの話(人形)

賛美。**りかこ**、角でぶって、耳に血が出ている。

マーリー「**だめ**」と**男の子**に言う。

「**どうしたの**」「**これいたい**」「**ちょっと**」「**だいじょうぶ**」

りかこの持っている箱を取って、片づける。二列に並ぶ。身長・体重測定。

11時00分 (皆、うわばきを教室のすみにそろえる)

先生「マーリー、girlだから、赤い線にならんで。」マーリー、移る。

全員、静かに、一人一人、身長測定の様子を見ている。マーリー、102cm。

マーリー、**りかこ**の後ろを追って走る (2～3回)

先生「シューズをはいて。」

セバスチャン、マーリーにくつを渡す。**セバスチャン**とマーリー、ダンボールの家のなかへ。**ともたか**と「**ばー**」先生たちは新聞をやぶる。

マーリー「**みて、みて、せんせい**。」**りかこ**と二人であそぶ。

11時25分 マーリー、**セバスチャン**と新聞をいっぱい集める。マーリー、先生と新聞をジャンプして破る。仲間に入ろうとする。みんなの方も気になるが、**セバスチャン**と二人で、ダンボールの箱に入る。

マーリー、**こうすけ**を押して、泣かし、頭をたたく。

マーリー「**だめよ**。」ブロックを箱に入れようとする、中に**こうすけ**が入っている、ブロックを投げつける。ショウヘイも、**こうすけ**をいじめる。

ショウヘイ、しかられて泣く。

マーリー「**どうしたの、おかあさん?**」

ゆりえ「**そうだよ**ね」

マーリー「**うん、だめ**ね。」

ゆりえ「**はいろ**う」

マーリー「**うん**。」**ゆりえ**と遊ぶ。

11時45分 ショウヘイが転ぶ。マーリー「**だいじょうぶ?**」

マーリー、日本人のこどもと接触するようになり、日本語がよく出てきた。

第9回観察 1995年6月12日(月) 9:50-11:30 登園第10週目

9時45分 バス幼稚園着(曇り)。マーリー一人で教室へ行く。**セバスチャン**にあまり注意をはらわない。**だいち**(4歳、ちゅうりっぷ組)に興味。**まみち**を追っかけて、何回も廊下、庭を走り回る。**まみち**を抱く。カバンをほったまま。教室へ入ったり、**まみち**がガラス戸を閉める。また追っかけて走る。

10時00分 先生に言われて、上履きに替えようとするが、また外を走る。教室へ入ったり、外へ出たり。先生が渡したビニールの袋を捨てる。荒っぽい。

10時07分 教室で先生の近く、ビニール袋をもって、立っている。やっ、カバンなどを、戸棚に入れて落ちつく。

10時10分 一人で、隅に座って本を読む。

マーリー「**りかこ、りかこちゃん**」と追っかける。肩をたたく。**りかこ**のカバンを戸棚にかけてあげる。

マーリー「**ここ**」

- 10時20分 外へ出て並び、お祈り。グループごとに集まり、体操をするが、マーリーはできないで、立ったまま。
- 10時30分 旗にもどる。マーリー動けない。指をくわえる。スインも、右指を口へ。全員すわって、話を聞く。暗唱聖句。
- 10時34分 行進して、組ごとに円を描いて、先生中心に「こんにちわ」の遊戯。体操。足のばし、手ブラブラ、ジャンプ。マーリー立ったまま。
- 10時55分 まりこと二人で砂遊び。まりこ「はなよ、はな」マーリー、何か言うが、不明。まりこ「みて、わたしのおすな」「ねんさやこ?」とマーリーに聞くが、マーリー無視して、砂遊び。
- 11時00分 まさひろ、砂をマーリーにかける。
粘土遊び、列をつくって材料をもらう。先生、順番を守らせる。
マーリー、机のところに立って、皆が粘土をもらうのを見守る。
マーリー、ブルーの粘土と容器を貰い、まみちの隣に座って遊ぶ。
- 11時25分 まさひろ「これちょーだい」
マーリー「うん」「これ?」と聞くが、まさひろ無視。
マーリー、まみちを見て「まーちゃん」と呼ぶ。粘土遊びつづく。

第 1 0 回観察 1995年 6 月26日(月) 9:50-11:20 登園第 1 2 週目

- 9 時50分 バス幼稚園着 (小雨)。マーリー教室へ向かう。先生にカードを渡すが、黙って立ったまま。まりこがマーリーの髪を触り、「マーリー」と言うが、無視。マーリーは依然として立ったまま。教室の中を覗く。誰かを探す? カバンは廊下に置いたまま。
- 9 時55分 やっと、くつを脱ぐ——そのまま、腰をおろして。
- 10時05分 上履きをはき、教室へ入る。カバンをカバン掛けにかけて、皆の仲間に入る。先生の手をとり、うれしそうに飛び上がる。タオルを掛ける。
マーリー「ねー、ねー、せんせい」手をとり、話しかける。
マーリー「みーちゃん」(みさと) おいでおいでをする。
マーリー、こうすけを追っかけ、掴み合いをする。何回も走り回る。
マーリー「りかこちゃん、おいで」と手招きする。
廊下で葉にのつたてんとう虫を手にする。
マーリー「ねえ、みて、これ、だんごむし」と見せにくる。
マーリーは先生に「ねえ、せんせい、みて。これだんごむし」
先生「これは、団子虫じゃなくて、てんとう虫の赤ちゃん」
マーリー「これ、あかちゃん」と、まりこと手をつないで中へ入る。
マーリー「りかこちゃん」と呼ぶ。
マーリー「しょうへいくん。おいで。」と何回も呼ぶ。
- 10時30分 二列に背の順に並んで、挨拶のあと、
マーリー「せんせい、バス、おむかえ」二階へ登る。母親が後ろに掛けている。全体で、祈り、歌、お話。絵本。
- 10時50分 マーリー、なつみと手をつないで、部屋へ戻る。二人で本を広げている。

- 11時05分 マーリー「**りかこちゃん。おいで**」と言って、椅子を運んであげる。三つのグループに分かれて、シールをはる。
マーリー「**りかこちゃん。まだよ。**」
マーリー「**てにはっちゃった**」と言って、見せる。
- 11時10分 マーリー「**せんせい、めぐみちゃん、バッグがない**」と言っていく。
今日は、セバスチャンが休み。マーリーは、いろいろの子どもと接し、仲間に入っている様子が見える。ことばも、出てくる。

第11回観察 1995年7月3日(月) 9:50-11:30 登園第13週目

- 9時50分 幼稚園着(小雨)。マーリー教室で、机のまわりで何かをしている。田中を見て、「**ちょっときて**」(2回)。
- 10時05分 マーリー「**せんせい**」
セバスチャン“I will play with famicon.”
マーリー“**I want to go with you...**”セバスチャン“No.”
マーリー“Do you have to go?”
セバスチャン“Yes”
- 10時10分 セバスチャンの後について歩く。
マーリー、女の子の列に座るようになった。
マーリー、まりこの後。田中に向かって「**ね、ね、ちょっと、きて。**」
- 10時15分 列に座って、先生の絵本を聞く。マーリー、左手を口に。**まさひろ**が入ってくる(バスが到着)
マーリー「**まーくん**」と呼びかける。「**ショウヘイクン**」
- 10時25分 二列に並んであいさつ。二階へ列で行く。祈り、話。「**バードとミミ**」
- 10時50分 ハレル、ハレルの歌。
- 11時05分 教室にもどる。トイレ、椅子に座る。機関車のように、部屋を走る。橋を作り、くぐり抜ける。マーリー、皆の中で自然に行動する。

夏休み後、またどのような変化が起こるか楽しみである。

注：表の中での幼児の人名は、すべて仮名に変えてある。また、幼児の名前で、カタカナ表記した幼児は外国人幼児または国際家族の子どもを示す。ひらがな表記の幼児は、それ以外の日本人幼児であることを示す。

* * * * *

分析は、主対象児マーリーの発話内容と、他の園児たちとの社会的な行動・インターアクションを中心に分析した。クラス担任・園長との会話は、日本語獲得や言語発達の状況を分析するのに重要な手がかりを提供するので、副次的な分析の対象とした。

なお、入園直前のプレイメイトの集まり(多国籍の子どもたちのための共同保育)に関

して行った予備的観察実施の際、マーリーの両親各々から独立に得た情報では、家庭の言語はアメリカ英語であるが、日本語に関してマーリーはすでに「こんにちは」・「だめ」・「すみません」・「そうね」の4語を話すとのことであった。この片言でも入園以前から日本語を話せるという条件は、在日外国人幼児にとって非常に重要な初期異文化適応の鍵となっていると考えられる。なぜならば、片言でも言葉が通じるという条件は、それが異文化の壁を乗り越える突破口となり、社会的側面での異文化適応を促進させ、第二言語としての日本語獲得をよりスムーズなものにしていきやすいからである（宮川、1996）。

このことに関連して、第1回観察（登園2日目）では、クラス担任を「せんせい、せんせい、せんせい。」と日本語で呼んで追いかける場面が、記述されている。同様に、第2回観察（登園2週間目）でも、マーリーが「こんにちは」を言う場面も記述されている。

これは、片言日本語の獲得が始まっていくことを示す、先の両親による報告とも一致した事実ともいえる。外国人幼児の日本語の獲得過程としては、非常に早期の日本語発話の出現事例として、この事例を位置づけることができる。

また、第2回観察の資料には、入園以前からプレイメイトでも既に一緒に英語の通じる、クラスメイトのセバスチャンと親密な仲間関係が形成され始めていることを窺わせる記述がある。他にも、第1回目観察にはオリアナ、第2回観察には、メイといった英語の通じる相手との断片的な会話や社会的行動の片鱗が、認められる。これは、マーリーが、仲間との関係を維持・発展できるのに基本的な社会性の発達が十分な水準に発達していることを窺わせる。ただし、最初の約1か月間は、言語的な壁がなく、すでに仲間遊びの体験を持っていたセバスチャン中心、あるいはセバスチャンとの関係を基盤にして、他の母語の通じる幼児と選択的に仲間関係を展開していたものと推測できる。したがって、この間英語での活発な発話は記録されているが、日本語獲得面ではそれ以上の変化は、観察されていない。

しかし、入園約1か月後の第5回観察あたりから、セバスチャンとの関係を基盤にしながらも、日本人の子どものクラスメイトたち（まさひろ・ゆりえ）との仲間関係の拡大が見え始め、そのことと関係して、相互的なやり取りのある日本語の会話が始まっていることが推測できる。また、この頃から、母語の通じるセバスチャンとの会話でも、英語と日本語が入り交じり始めていたものと推測できる。登園6週目・7週目に当たる第6回観察・第7回観察では、またセバスチャンやショウヘイとの仲間関係が中心となっているが、会話は英語と日本語が、混ざり合っている。

登園8週目に当たる第8回観察では、セバスチャンとの関係は同様に継続しているが、クラスメイトりかこやまりこ、ゆりえとも、複雑なインタラクションを持った仲間遊びや日本語の会話が展開されて始めていると考えられる。

登園第10週目に当たる第9回観察では、この日セバスチャンとのインタラクションは観察されず、日本人クラスメイトのまみち・りかこ・まりこ・まさひろとのインタラクションが中心で、ついに日本語会話ばかりで、母語の発話が見られなくなっている。

しかし、登園第13週目に当たる第11回観察では、セバスチャンとの会話で、再び英語が話されているので、日本語の獲得が進みながらも、バイリンガルの状況が維持されていることがわかる。

マーリーの最初の3か月間の変化は、バイリンガルの言語発達の可能性を秘めた幼児

の複雑な言語発達プロセスを垣間見させている。ここで示された2言語使用の変化は、バイリンガルの傾向を早期に示し始める幼児の事例としては、あるいはごく一般的な発達パターンを示しているものと位置づけることが可能かもしれない。すなわち、幼児の第2言語獲得のプロセスは、単純に一方の言語が加算的な発達をしていくのではなく、相互独立的あるいは同時並行的に発達したり、一時期一方の言語が優勢となり他の言語の発達が停滞する、あるいは両言語が同一の対象や状況で混在出現したり、相手によって微妙な言語使用の使い分けが生じたり、かなり複雑な言語発達のプロセスが存在しているものと考えられる。日常的に2つ以上の言語の使用環境が存在していれば、ごく単純にバイリンガルの傾向が年齢とともに加算的に発達していくのではない、バイリンガルの子どもたちの複雑な言語発達の様相を解明していくためには、この事例の詳細な分析を進めていくことが、さらに有効な情報を提供していくかもしれない。

引用文献

- マーハ J. C.・湯浅育子 1991 エリ子の場合：バイリンガリズムとグループ境界 言語, 20(8), 31-37.
- 宮川充司 1989 アメリカの子どもが日本の幼稚園に 小嶋秀夫(編) 乳幼児の社会的世界 有斐閣 Pp. 141-164.
- 宮川充司 1996 外国人乳幼児の異文化適応に関する事例的研究(1): 中国人幼児の事例 椋山女学園大学研究論集, 27 (人文科学篇), 125-141.
- 宮川充司・浅井道子 1988 在日米国籍幼児の日本の幼稚園への受け入れと適応: 入園後の半年 会津短期大学学報, 45, 25-44, の半年 会津短期大学学報, 45, 25-44.
- 宮川充司・浅井道子 1989 在日米国籍幼児の日本の幼稚園への受け入れと適応(その2): 入園後半年から1年半 会津短期大学学報, 46, 37-81.
- 宮川充司・中西由里 1994 日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究(I) 椋山女学園大学研究論集, 25 (人文科学篇), 47-74.
- 宮川充司・中西由里 1995 日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究(III) 椋山女学園大学研究論集, 26 (人文科学篇), 1-19.
- 中西由里・宮川充司 1994 日系ブラジル人幼児の異文化適応に関する事例的研究(II): 入園当初3カ月間の分析から・2児の比較 椋山女学園大学研究論集, 25 (人文科学篇), 75-84.